

特集

緑内障患者におけるビジョンケア

序 論

富田剛司*

今月の特集は緑内障患者のビジョンケアである。眼科医療にとってすべての眼科疾患の治療はとりもなおさず患者のビジョンケアを目指して行われている。その中でことさら緑内障患者に関するビジョンケアをとりあげる理由は何か。また、ロービジョンケアではなく、何故ビジョンケアなのかという理由については、岐阜大学の川瀬先生が詳しく述べられている。川瀬先生も述べているように、緑内障は“今そこにある危機”が実感しにくい疾患であり、さらに自覚症状が出た段階でも各患者の社会活動性や性格等によりケアのニーズが一人ひとり異なるという難しい面を持っている。我々眼科医は特に白内障における手術の劇的なビジョンケア効果を実感しているだけに、目に見える形で効果が判然としない、しかも、患者もあまり喜ぶことの少ない緑内障のビジョンケアには苦手意識を感じることも多いと思われる。しかし、現実には一定の割合でそのような緑内障患者は存在し、その対応は避けて通ることはできない。患者の言葉に耳を傾け寄り添っていく姿勢が今までやや欠けていたのではないかという反省を踏まえて組まれたのが本特集である。

まず、緑内障患者はどのような見え方をしているのかということを十分に把握することが何よりも大事である。見え方というのは、視野が欠けて

見にくいということにとどまらず、視力や暗所での視機能、識字機能に関してまで把握する必要がある。このあたりの重要性につき、川瀬先生が述べられている。具体的なビジョンケアの基本については、神奈川リハビリテーション病院眼科の久米川先生が解説されている。また、重症例への対応については、新潟大学の張替先生が実に具体的に細かく解説されており大変参考になる。さらに、患者が強く動揺し、我々もその対応に苦慮する就労への対応については、井上眼科病院の鶴岡先生からの熱いメッセージがある。患者ひとりだけ、医者ひとりだけでの対応は難しく、多くの機関や周囲のサポートによって成り立っていくものであることが強調されている。最後に、関連施設との連携の重要性、そのキーパーソンとなる我々眼科医の役割の重要性についておおたけ眼科小手指医院の林先生が解説されている。林先生も述べているように、現状は日常診療内で患者に適切なアドバイスを伝える時間、場所ともに不足しており、眼科医を中心としたビジョンケアが充実しているとは言い難い状況である。我々眼科医は少しでも患者のQOVが良くなるように、そしてそのような仕事をするのが眼科医であるという自覚をさらに強くしていく努力を怠ってはならないと考える。

* Goji TOMITA 東邦大学医療センター大橋病院眼科／済安堂井上眼科病院(東京都千代田区)